

上郡町の偉人

大鳥圭介

「鵬程万里」第十五回

著者 中川由香

「クララの明治日記」という記録があります。商法学校講師の米国人ウイリアム・ホイットニーの娘、クララが記した日本滞在中の詳細な日記です。圭介はウイリアム一家と親交深く、クララの日記に頻出します。当時の社会風俗と共に、圭介の行動や人柄、家族の模様も垣間見える、貴重な資料です。

日本も企業経営に必要な会計簿記を習得し、資本主義経済社会を発展させる為に商法学校が必要と森有礼が考え、ウイリアムが招聘され、一家は明治八年来日しました。しかし商法学校は理解が得られずに設立の目途が立たず、一家は路頭に迷いかけてました。この状況で、圭介は渋沢栄一、福沢諭吉らと共に商法学校設立に尽力しました。「興国三策」でも産業試験所、特許局と共に商法学校の設立を圭介は建築。さらに私的にも圭介は一家を支援しました。

圭介はクララ来日後の日記で「私たちの古い友達」と紹介されます。人物評が率直で辛口なクララにも「とても丁寧で親切」と好かれていました。クララは自分の日本語を「勝さんや大鳥さんと付き合っておられるから立派な日本語になるはずですよ」と褒められます。明治九年二月に圭介が妻みちと共に長崎に出張になった際は、ホイットニー宅で歓送会が開催されました。「大鳥氏も最上機嫌で気まずさも堅苦しさもなく全て素晴らしかった」とクララはその時の印

象を記しています。同九月に圭介が炭鉱調査に蝦夷へ行く際、別の歓送会が精養軒ホテルで催されました。クララの家は精養軒の近くにあり、クララは宴の声の中に圭介の笑い声を聞き分けました。同年のクリスマスにも圭介は一家に招待されました。また、工部大学校で気球を上げた日、クララも見学に来ました。

クララは圭介の娘、ひな、雪、菊とも友達でした。長女ひなはパーティで男性に腕を取られるのが苦手でした。代わりにひなの腕を取ったクララにひなは感謝しました。ひなが一番好きな友達にキスをした際に自分が選ばれた事を、クララは嬉しげに記しました。一方で、クララの母が彼女たちを好きではなく音楽を教えたくない事や、招かれてない友達を連れてきて困った事なども、率直に記しました。

ひなと大名の血を引く上杉氏との結婚についてもクララは触れています。「結婚なさったらさぞうまくいくだろう」と述べ、婚約者同士が見知らぬ他人のように振舞うのを「日本の恋人ったら！」とお節介を焼きます。そして姉がいなくなり寂しがる雪を励ましました。ひなと上杉氏は明治十一年五月に結婚しましたが、立派な家柄を有難く思わず嬉しそうではないひなを、クララは心配しました。(ひなはその後離婚し、工部大学校博物場の奥田象三と再婚) また、圭介の三女の菊について「お菊は大人

しくよい子で、大きな美しい穏やかな目をしていて本当に美人。皇室の花の菊という名前がぴったりの少女」と描写します。菊が養女にやられて育った旨も記されました。菊が生まれた時、圭介は戊辰戦争の只中で会津で苦闘しており、佐倉に身を寄せていたみちの当時の苦境が伺えます。

明治十一年二月三日、圭介の妻みちは肺炎で亡くなりました。陰気で寒い日の葬儀に参列した母の話でクララは詳細に記します。葬儀には工部大学校の教師や生徒も含め、千人近くが参列。僧侶のお経、焼香の様子を描写し、キリスト教徒のデイクソン氏も焼香。白い着物を着て髪形を変える決まりで、若い娘は葬式に行かないのが普通である旨など記されました。西洋式でも日本式でもない奇妙なお葬式だったと母アーナは感じたそうです。その後大鳥家の庭に、彫刻家ラギーザによるみちの立派な胸像が飾られたと記され、圭介の妻への愛情が忍ばれます。

明治十三年一月、一家は日本を離れる事になります。圭介達は一家を久保町の売花亭に招きました。この時ひなは、くじでおかめの面を付けて踊る役になりました。それを嫌がるひなの代わりに、圭介がおかめのお面を付けて踊り、皆を喜ばせました。一家との別れの際、圭介の上着のラベルに涙がいつぱいついていた事を、クララは覚えています。

このようにクララの日記には、彼らと共感性豊かに家族ぐるみの深い交流を持つ圭介の様子が、生き生きと記されています。公的記録にはない当時の圭介一家の日常を、思い浮かべる事ができます。